

親と子の間に生じる発達

—親子の現実のやり取りから臨床へ—

企 画：	文化比較・行動比較分科会
	田島信元（白百合女子大学）
	近藤清美（北海道医療大学）
司 会：	田島信元（白百合女子大学）
話題提供者：	岡本依子（湘北短期大学）
	上村佳世子（文京学院大学）
	河原紀子（共立女子大学）
指定討論者：	近藤清美（北海道医療大学）
	田島信元（白百合女子大学）

〔企画主旨〕

親子関係の研究において、子どもの発達によりよい影響を及ぼす親の変数を探し出すことが主要な課題であるかのような様相を呈している。しかし、現実の親子関係を観察した研究では、親子双方が相互作用の中で発達し、子どもは其中で能動的な働きをしていることが明らかにされている。本シンポジウムでは、それらの知見に基づいて、親子への発達支援の根幹を問い直すことを目指す。

「発達の間を整備する子ども」

岡本依子（湘北短期大学）

はじめから親だった人はいない。「親になる」とは、一朝一夕でなせるものではないにもかかわらず、私たちは親に親であることを押しつけ、親を子の発達における単なる入力刺激として捉える傾向が未だなくならない。そこから、「よい親」という発想が生じ、子育てにおける「べき」論がはびこるのだろう。そして「よい親」や子育ての「べき」論の呪縛から逃れるため、反動として「手抜きばんざい子育て」が現れるが、それが手抜きである以上そのツケは親に返ってくることとなり、実のところ、親を何も救っていないのである。親が子を育てるといふ側面が重要であるように、子が親を育てる側面にも目を向ける必要がある。

たとえば、岡本ら（2003）は妊婦に胎動に関する日記をつけてもらうよう依頼し、胎動への意味づけの変化から親への移行の初期段階をみようとした。胎動の感じ始めの時期は、胎動を赤ちゃんとして捉えられず、「モグラ」「虫」といった人間以外の表現を用いていた。にもかかわらず妊娠が経過するにつれ、「足で蹴った」「手で押した」という意味づけができるようになり、徐々に自身の身体の中に感じる動きを赤ちゃんのものと意味づけられるようになったのである。妊婦にとってコントロールできない「他者としての胎児の動き」が、徐々に赤ちゃんの存在を具体化し、そこに映し出される自己を母親として認識できるようになるのだろう。

また、前言語期のコミュニケーションを扱うIDS（乳児に向けられた発話）研究には、親のIDSを子の言語発達のための入力刺激と捉えているものも少なくない。しかし、IDSを親の代弁（岡本, 2001; 2008; 投稿中）という視点から分析すると、初期には、親も乳児とのコミュニケーションに対して不慣れな様子が見られたが、子どもの意図や感情の表出が豊かになってくるにつれて、親の代弁もその機能が制約されていった。親の代弁によって子どものコミュニケーションの未熟さが補われている一方、親も代弁を通して子どもの意図や感情を推測し、解釈を鍛えていったのだろう。

このように、親も発達するものとして捉えることによって、子が親を発達させることの意味を問うことができる。子自らが発達の間を整備するという子のタフさ、発達への貪欲さもみえてくるのではないだろうか。

「親子の相互行為から立ち現れる発達」

上村佳世子（文京学院大学）

幼児期の子どもとの親との遊びの相互行為の短期縦断的資料に基づいて、両者の関わり方や認識の変化について述べる。24カ月時を開始時点として、3カ月毎に家庭訪問をおこない、ままごと遊びのお

もちやを介した親子の遊びの相互行為の観察をおこなった。24カ月時点の子どもは親に導入されて場面に受容的に参加し、おもちゃの扱い方も同様であったが、月齢が進行していくと子どもの認識や発話レベルが変化し、おもちゃを媒介的に使用しながらことばによって相手とかかわり、遊びを主体的に構成できるようになっていった。それに伴って親の働きかけも説明的、指示的なものから、子どもに主導させる応答的、補足的なものへと変化していった。さらに、各時期において観察された約20分間の短い相互行為過程においても、親は子どもの場面への参加態度や理解のあり方に合わせて、異なる役割を演じ、具体的な働きかけをしていた。

社会的相互行為における親の働きかけは、予め想定した子どもの発達に応じて用意されるのではなく、目の前の子どもの行為や発話に対応するものであることから、親自身もやりとりの経験を通じて、常に子どもや場面についての認識を新たにしていることが窺えた。社会文化的アプローチの観点からみれば、社会的相互行為をとおして参加者はそれぞれに認識を新たに形成していくものであり、子どものみならず親もやりとりの経験をとおしてその文脈や対象についての意味を構成、再構成していくものと考えられる。日常生活のなかでは、親は子どもがさまざまな行動様式や言語スタイルを獲得し、生活文脈のなかで適応していく社会化の担い手として機能するものとして位置づけられている。しかし、親もまた、以前とは異なるやり方で現在の子どもの対する働きかけや支援を提供していくことから、親自身も子どもの状況や場面における経験をとおして発達の変化をしていると考えられる。

「食事場面における親子の関係性—家庭と保育園における1,2歳児の拒否行動の比較から」

河原紀子（共立女子大学）

食事場面では、養育者には必要なものを必要なだけ、適切な仕方では食べさせたいという明確な意図があり、子どもには好きなものを好きなだけ、自分の思ったように食べたいという意図や能動性が存在する。そのため、子どもと養育者の間に対立や葛藤が顕在化しやすいことが特徴である。

本報告では、11か月から28か月までの幼児21名を対象に、家庭と保育園における食事場面とその前後を含む行動観察を行った。その結果、第1期（11～18か月）では、保育園より家庭で拒否が多かった。また、食事の進行（摂取）状況により、その前半と後半における拒否の出現傾向を比較すると、食事の後半になると家庭より保育園で多かった。つまり、第1期では、保育園では満腹状況での拒否が多いのに対し、家庭では食事の前半、つまり食欲が満たされていないにもかかわらず子どもは拒否をすることが明らかとなった。これは、第1期では「食べさせてもらう」ことが保育園より家庭で多いこと、自分で食べたいけれども食べさせてもらえないといった状況等が関係していると考えられる。さらに、第2期（19～28か月）になると、家庭でも保育園でも同程度に、また食事の前半から拒否が見られるようになった。発達に伴ってこれまで家庭でより多く示していた拒否を保育園という社会的な場でも示すようになったことが示唆される。しかし、注目されるのは拒否から1分以上の長い泣きへつながり、親子の「確執」ともいえる状況へと展開する事例が家庭でのみ観察されたことである。ここには、たとえ空腹であっても「思ったように食べたい」という子どもの意図があり、それが無視されたり、軽く扱われることに対する子どもの強い自己主張が読み取れる。このような食をめぐる対立を契機として、親は一見些細なこと、無駄なことに見える行動の背後にある「子どもの想い」に気づくとともに新たな関係調整が図られることになる。家庭における食という場は、親子が相互に自己主張する場である。そして、何より子どもは親や周囲のおとなからの働きかけを一方的に受け取る存在ではなく、自ら主体的に能動性を発揮する存在であると捉えることが重要である。

指定討論者である近藤は、親子への発達支援について、これらの知見に基づいて、親に特定のスキルや能力を身につけることを目指す発達支援の問題点を挙げる。また、子どもの能動性に注目することで、親が子どもの行動をとらえ直し、親自身も行動を変え、親が変わることで子どもの行動が変わり、それがさらに親を変えていくという循環的な親子の発達支援を提起する。

指定討論者である田島は、親子間の相互行為こそが、親子双方のそれぞれの発達に寄与する直接的原因であるという視点から、発達支援の根幹を問う。親と子の発達の生物学的制約を踏まえながらも、親子間の相互行為といった社会文化的制約のあり方を吟味することで、両制約が統合的に展開していく過程を支援していくことが発達支援の根幹であると位置づける。また、その観点から、人志向的分析を行い、子どもを、親を、あるいは、親子のペアを発達システムとしてとらえ、縦断的に分析する発達科学的アプローチがこの問題を考える際に有用であることを明らかにする。